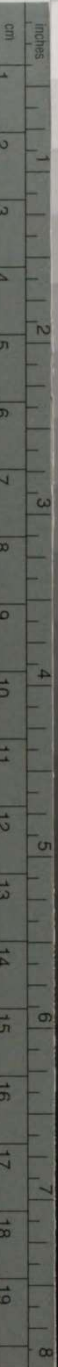


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



188
609

長州鐔 (全)



長
州
鐔



寄贈本

長州鐔訂正

頁	行	訂正
一	未行	掲げぬばなりません
四	三行	元録は元禄の誤
〃	未行	鋤出しの句讀を疎く
五	十行	あります。が至て少な
八	四行	明徳頭山口鐔工
〃	〃	恒之(文右衛門)
二〇	未行	鉄の外裏金を見ません
二二	未行	鋤出し彫の鐔を見ません
二四	七行	思はれませぬので記して
〃	未行	芦に鷺の図
二六	未行	厚手で地鉄良好であります
二七	五行	其撫角菊模様

(以上)

長州鐔 目次

一、はしがき……………一頁

一、長州鐔總論……………一頁

一、長州鐔各家……………六頁

一、同系圖……………七頁

一、系圖に就て(追加)……………追加ノ一

一、長州鐔工各派及作品……………一九頁

附圖(コロタイプ版二〇面)

(一)古	萩(天正)	(二)金	信(慶長)	(三)中	井友	恒(元祿)
(四)同	上(〃)	(五)同	上(〃)	(六)岡	田宣	政(元祿)
(七)同	上裏	(八)岡	田宣	(九)同	上裏	賀(元祿)
(一〇)岡	本友	(一一)河	治友	(一二)系	治友	久(享保)
(一三)中	井後友	(一四)岡	本友	(一五)河	治友	久(享保)
(一六)井	上清	(一七)中	原幸	(一八)小	野光	高(天保)
(一九)直	行(嘉永)	(二〇)豊	原幸			
			幸(安政)			

(目次終)

長州鐔

小倉惣右衛門

はしがき

長州鐔の事を書きます前に、先づ全國に於て鐔作者の最も多い國はと問はれますと、誰も長州を第一とすと答へられる處であると思ひます、諸銘鑑及現鐔より蒐集しました作者名は、實に百八十餘人の多數に上りましたが、尙ほ此外に洩れた者も少なくはなからうと思ひます。

之は其作品を他國他藩に盛んに輸出し、販路を開いた事が大原因をなし、其結果は恐らく全國到る所に長州鐔を見ない所はないと云はれて居ります、由來此國の鐔は精作多き故に一般に愛玩されましたもので、又拵に用ひ釣合よき故刀劍家に賞用せられましたもので、其工匠數の多きも理由のない事ではありません然るに古來一の著書なく系譜作名等の傳はりたるもの誠に少なく、作者の苦辛丹精も遂に世人に知られず、空しく徒勞に歸するの恐れあると思ひまして之れを書きます事に致しました、幸に大方各位の斧正を得まして尙ほ洩れたる作名を加へ、他日の完成を期したいと思ひます。

長州鐔總論

長州鐔と云へば先づ時代順に古萩、古長州の事を掲げぬはなりません。

古萩鐺は此國最古の物で天正頃と云はれて居ります。鐵地、眞丸形に菊花葉を地透しになし、角耳にて兩櫃穴は稍稍圓であります。圖様は菊に限り未だ他の圖を見ません、平安城透しに酷似して居りますので、恐らく平安城有縁でなければ轉化した物であらうと思はれます。相異の點は耳と櫃穴であります。概して大形稀にして小鐺多く、古きは薄手にて次第に厚くなりたるがごとく、在銘物なき故作者を知る由なく(圖參照)圖に出したるは厚手の物であります。

古長州鐺、鐵地、拳形、耳打返し、唐松仙人圖、大形松に眞鍮象嵌を用ひ、仙人の顔面銀を配し、着衣金象嵌等總て金家式にして、無銘なる故作者は不明であります。之れは亡祖父三十數年前愛藏のものでありましたが其後行方詳かならず、而して爾來此種の鐺を見ません、古長州とは誰を云つたものでありますか、聞きませんのは遺憾とする處であります。金家風の鐺を作りますイトカ銘、其他の後年作の物とは作行雲泥の差があります。時代も亦相違して居ります。此鐺は若かくとも寛文よりは古き様に記憶して居ります。

長州萩金信(圖參照)と銘する鐺は、何派に屬するものか未詳であります。時代は慶長頃と思はれます。圖様桃山式なる處時代參考に資する處であります。又た地に槌目を打ちたるは宛も甲冑師の如く、後の作に見ない處で、又鎌倉鐺に似て居りますが、厚手なる處が相違して居ります。

以上掲げました鐺は皆時代の古い物でありまして、所謂長州鐺と稱へられます物は、元祿頃に始めて定まりました様に思はれます。埋忠明壽の入門が長州に移住しましてから始まりたる様に、古來云ひ傳へられて居りますが、其作品より判じますれば、正阿彌傳であります。埋忠氏移住前既に名高き中井氏を初め岡本、金子の兩氏此國在來の鐺工として居住し、埋忠姓岡田家に巧手の名ある、二代宣政の如きでさへ時勢に感化されたと見へ、全然正阿彌化せられました。而して尙ほ精査致して見ますと、正阿彌より出でて所謂長

州鐺の典型が造られて居ると思はれます。即ち鐵眞丸形、薄手、角耳にて、精巧なる肉彫透しに金象嵌を配したる。元祿頃に多く見る處の鐺は古き典型であります(圖參照)、又鐵長丸形、厚手、角耳にて、地鐵鍛鍊良好にして、精巧な鋤出し彫をなしたる、天保以後に多く見る處の鐺は、後の典型であります(圖參照)、猶此國に於て見逃す事の出来ない鐺は元祿頃に作製された鐵丸形の板鐺に金銀赤銅眞鍮四分一素銅等を据物象嵌になした正阿彌式のもので、即元祿頃には前記の肉彫透しに象嵌のある長州式の典型である様式と、此正阿彌式据物象嵌の板鐺の二種ありますが、此板鐺には岡田宣政作に耕作と餘人物の二名鐺があります(圖參照)此爲めに宣政は名工に數へられます。當國にて有名なる作家は中井、河治の兩家にして、埋忠姓の岡田家之れに亞ぎ、其他岡本兩家、金子、中原、藤井、井上、八道の諸家ありて、其内中井、岡本、金子は前述の如く此國在來の鐺工にて正阿彌系であると思はれます。岡田家は初代政知は埋忠明壽の子なりと云へば、正統でありませうが其の作品は未だ見ません。二代宣政は前記の如く正阿彌化して居ります。河治氏は中井より出でたりと云ひ、又埋忠派なりとも云ひ中原氏は金子より出でたと云ひます。諸家の作風は大同小異でありまして、判然區別すべき特徴はありません。形に於ては丸形最も多く、木瓜形其他は稀にして皆角耳で櫃穴は丸き方であります。板鐺、透し鐺の二種共ありまして主として鐵を用ひ他の變り金は少なき物であります。尙ほ之れを再査致しますれば時代によりて形狀、圖様配色等にも變遷がある様であります。而して之れを大別致しますと、元祿享保式、寶曆天明式、天保嘉永式の三様に分つ事が出来ると思ひます。當國全盛の期は元祿頃でありませう。中井善助友恒、岡田如休宣政、岡本友次、金子幸仲、八道友清、河治友周、山本金幸、糸賀半左衛門等の名匠は皆此期の人にして、肩を並べ技を競ひたる跡が歴然として偲ばれる様にはれます。

元祿以後三期に分けると申しましても、各工の作風は一様でなく、多少の變化は免れ難いものであります、且同人の作でも、厚手に作り又薄手に製する等其他例外も少なくありませんが、只だ其の時代に最も多く見る所の作風を露はすのであります、尙判別を容易ならしむる爲めに、元祿と享保とに分ち寶曆と天明とに分ち、又天保と嘉永以後とを分けて説明する事に致します。

元祿式にも二様ありまして、前に述べました所謂前の長州の典型である所の、鐵地、眞丸形、薄手角耳の大鐺に、精巧なる肉彫透しをなし金象嵌を配したる、正阿彌より轉化した物と、同型の板鐺に、金、銀、赤銅、眞鍮、銅等の据物象嵌色繪の、準正阿彌式との二様であります、中井友恒、岡田宣政、糸賀氏等は重に後者を作り、他は皆前者を多く造りました様に思はれます、作者銘は概ね表切羽台の向ひて右に、長州萩住又は長門萩住と切り、左に姓と通稱とを切り、裏に名と作の字を多く切ります、例へば右に長州萩住、左に中井善助、裏に友恒作とあるが如くであります、若し通稱を切らない場合は表ばかりに切ります、字體は楷書で大銘であります、此期の特徴とする處は、眞丸形、薄手で、大形なるものが多くある處であります。

享保は概して元祿と同様であります、形に眞丸と長丸の二様ありまして、板鐺は薄手が多く、透し鐺は厚手になり、所謂長州式の透し鐺が少なくなる様であります、銘振りは同様で大銘であります。

寶曆式は、眞丸形、厚手が多く、丸耳、角耳、何れもありません、肉彫透しと鋤出し彫が多くありまして、金銀其他の配色が少なくなり、又小形鐺が漸次多くある様に思はれます、銘振りは概して前と同様であります、稍小振になります、又中井友信の如きは、二字草書銘の變體があります、此期の特徴は眞丸形、厚手に配色のない所であります。

天明は、長丸形厚手に鋤出し、彫が多くありまして透しが少なくなり、又小形鐺が多く、金象嵌は稀に見る様になります、銘振りは益小さくなり、長州住人又は長藩家臣等の字を用ひ、總て表切羽臺ばかりに切ります、長丸形、厚手、鋤出し彫を特徴とします。

天保式は、所謂後の長州式が備はりまして、長丸形、薄手にして、鍛鍊良好なる地鐵を用ひ、精巧なる鋤出し彫をなしたる、美しい鐺が最も多くありまして、稀に金を配したのもあります、角耳で概ね耳を鋤き、透しは少なく小形鐺頗る多くあります、銘は長州萩住何某作と切ります、長藩何某造と草書にて切りましたのもありますが、皆表ばかりに切りました、是れ亦た小振りであります、此期の特徴は、長丸形、薄手、鐵地良好の鋤出し彫であります。

嘉永以後は、概ね天保式に似て居りますが、長丸形は一層長手になりまして、稍厚くなります、地鐵は益良好になり、鋤出し彫も亦精巧なるものが多くある様に思はれます、角耳で耳を高く鋤残したのも亦頗る多くあります、透し鐺は肉彫透しであります、至て少ない様であります、大形、小形、薄手、厚手等種々ありますが、金象嵌は稀であります、銘は長州住、長藩、長陽萩住等ありまして、何某作と切るものが多く、書體は楷書草書等ありますが、皆表ばかりに切りました、亦た小振りて天保式と略同様であります、特徴は長丸形が尙ほ一層長手になる處であります。

以上三期の變遷は概略前述の如くであります、要するに、初めは大形鐺に金銀の配色をなし、透し鐺多く、漸次小形に板鐺が多くなりまして、配色なく遂に板鐺に鋤出し彫になりました、系圖に出しました時代は、此標準に因り、現鐺より掲げましたのが多いのであります、古來長州と江戸伊藤とは、相似たりと云はれて居りますので、共通の點を研究致しますと、武州住正恒作にある、鐵、眞丸形、鋤出し彫、唐山水又は雲龍等の鐺は、長州に似て居りますが、正恒は元祿享保頃で、此時代長州には鋤出し彫は稀であります、又

久光 中井十右衛門

友富 中井彌平次

友道 中井善兵衛

系圖を見るに、信恒の前に光恒(明徳頭山口鑰士)恒乘(新左衛門)桓之(文右衛門)の三代ありますが、鑰作の有無が判明しません、恐らくあるまいと思ひまして省略致しました、又友光以下は代々の内の前後の名か、又は一門の子弟の内であると思ひます、又初代信恒と二代友恒の間が長きに過ぐる様に思はれますが、是れは尙ほ研究を要する處だと思ひます。

岡田家

初代 政知 理忠明壽子彦兵衛慶長頃

二代 宣政 善左衛門入道如休又三左衛門とも云ふ元祿頃

三代 宣重 彦左衛門享保頃

四代 政詮 彦左衛門初惣兵衛寶曆頃

五代 政勝 善左衛門

六代 政富 彦兵衛文化頃

七代 政知 惣兵衛天保頃

八代 政英 重次郎

宗武 山口住元祿年號あるものあり

喜鹿 理忠喜鹿郎鬼丸又喜六郎とあるもあり享保頃

宣繼 又宣次とも云ふ彦左衛門寶曆頃

宣英 左兵衛寶曆頃

重義 長州住

甚左衛門金家風

此系圖初二代の間亦長きに過ぐ、其間鑰工にあらざりしか、宗武以下は一門の子弟であります。

岡本家 本家熊之允系

初代 友治 次郎左衛門初宗次郎慶長頃製作稀なり

二代 友光 佐右衛門初喜平次家名を繼がずと云ふ

三代 友義 小兵衛延寶頃

四代 方高 佐右衛門祐喜と號す七拾歳にて隱居八十八歳歿す享保頃

五代 方一 小兵衛

六代 知賢 佐右衛門初熊之允春岡亭と號す

七代 豊章 源之丞草字銘天保頃

燕里 知賢二男他家相續柳太左衛門兜星又柳燕子と號す草字銘天保頃

光高 知賢門小野氏太郎兵衛又太郎右衛門とも云ふ天保頃

八代 豊信 熊之允

九代

友義 佐右衛門文久頃

友則 岡本故兵衛享保頃

忠利 岡本氏寶曆頃

忠一 忠利門重次郎

光之 天保頃

豐幸 草字銘安政頃

信周 草字銘安政頃

友勝

此系圖友則以下亦一門子弟であります。

岡本家 別家藤左衛門系

初代

友次 本家友義門藤左衛門元祿年中江戸に修業し其術精熟せるにより別家獨立を許さる八十歳歿。

二代

和義

三代

義勝 藤左衛門直勝と改む寶曆頃

四代

直恒 藤左衛門

五代

義房 義勝男藤之進後太兵衛直次と改む三十六歳にて歿す家名を繼がず

六代

義次 藤之進後太兵衛初名俊次と云ふ文化頃

茂恒 藤左衛門初名茂次後茂常に改む天保頃

直光 義次二男岩本七郎兵衛

知義 甚左衛門一説河治氏とも云ふ

金子家

初代

幸重 雅樂寛永頃

二代

幸仲 十郎兵衛元祿頃

三代

幸治 忠兵衛享保頃

四代

清正 善左衛門寶曆頃

五代

友治 三郎左衛門

六代

職軒 三郎左衛門

包朝 三郎左衛門享保頃

政信 金子氏寶曆頃

此系圖初二代の間亦長し、考ふべきことと思はれます、又職軒を中原氏としたる記録及イトカと銘するとある書がありますが、イトカは別に糸賀氏があれば共に誤傳したものと思ひます。

中原家

初代

幸直 吉兵衛金子幸仲門正徳頃

二代

幸登 吉兵衛初名幸久明和、天明頃

三代

幸利 忠左衛門初源左衛門子貞と號す文化頃

幸允 幸登二男初名幸之田村與一右衛門芝蘭亭と號す

度之 幸登門中村氏文化頃

四代

幸純 熊之丞天保頃

幸保 吉兵衛

五代

幸良 吉山氏度之門

智光 中原氏嘉永頃

幸光 磯部源之允文久頃

常信 中原氏

幸慶 中原氏

幸藏 中原氏

幸弘 長州住

此系圖初二代間亦長し、幸良以下は一門子弟でありませう。

藤井家

初代

清風

二代

幸永

三代

幸貴 源右衛門

井上家

初代

清高 正左衛門又庄左衛門或は十左衛門とあるもあり寶曆頃

二代

通高 甚兵衛天明頃

三代

政高 庄左衛門天保頃

四代

正高 嘉永頃

正昌 作右衛門享保頃

八道家

友清 市平元祿頃

友信 五郎左衛門享保頃

友久 作之進享保頃

幸久 七郎右衛門寶曆頃

吉久 七郎文化頃

友之 嘉永頃

宣之 理兵衛

八道氏系圖なきを以て、時代を推定し古き所より順次鐔銘を掲げました。

河治家

道祐 大内家人中井氏より別るとあり

友近 權之允元祿頃友周同人か

友周 權之允元祿頃

金幸 孫兵衛山本氏元祿頃

春政 九里氏元祿頃

忠春 四郎右衛門又四郎左衛門とあるもあり九里氏又河治初代と記したるもありと云ふ

糸賀 半右衛門又半左衛門とあるもあり糸賀氏名未詳イトカと銘するは同人か元祿頃

友次 河治氏享保頃

友久 河治六郎右衛門享保頃

友直 河治六郎右衛門享保頃

種亮 片岡興一右衛門防州徳山住又岩國住とも云ふ享保頃

忠義 片岡氏防州岩國住享保頃

久次 河治氏寶曆頃

友晁 河治氏寶曆頃

友範 河治氏天明頃

正雉 文化頃

政次 河治氏嘉永頃

友久 河治氏嘉永頃

友道 河治氏安政頃

權兵衛 神田氏山口住

友勝 河治氏

金直 河治氏

忠清 庄太郎岩國住象嵌工

金一 河治家五十部氏

種廣 片岡氏徳山住

種富 片岡氏徳山住

貞光 河治氏

義端 徳山住

久之 河治氏

正豊 河治氏

河治氏亦系圖なき故、一見しましたものを時代を推定し、古きより順次右に掲げました、年代書なきは未見のもので、次第不同に書き列ねました、河治家は此國に於ては殷盛なる家で、近世の鐺工は皆關係ある様であります、河治作鐵梅竹透し鐺は往々見る處で、寶曆頃のものと思はれますが恐らく仕入物でなければ偽物ではないかと考へます。

金信 長州萩 慶長頃

友信 長州萩住 元祿頃

友吉 享保頃

孝次 長州萩住享保頃

友重 鳥野茂兵衛豊浦住、跡絶 享保頃

古稀軒 長州萩住享保頃

忠正 晚翠軒岡部氏 享保頃

信之 長州 享保頃

恒方 萩之住 寶曆頃

信重 長州萩 寶曆頃

盛綱 長州萩住 寶曆頃

友荀 長州萩住 寶曆頃

方美 寶曆頃

信政 長州萩源 寶曆頃

正周 長州萩住 寶曆頃

昌明 長藩萩住 天明頃

之信 長州住赤名七郎兵衛尉 天明頃

森面 肥前國住國司雅樂之丞於長州萩と銘するあり寛政八辰年歿す。

友正 武原氏長霸城住 寛政頃

正定 長州住 文化頃

友寛 長州 文化頃

永義 長州萩住 文化頃

友次 長州住 文化頃

友之 長州住 文化頃

正明 長陽萩住 天保頃

友久 天保頃

光幸 長州 天保頃

友之 長州住 天保頃

友之 長藩 天保頃

直勝 長州萩住 天保頃

友忠 長州萩 赤銅縁あり金工か 天保頃

昌俊 長陽萩住 嘉永頃

義充 長藩 嘉永頃

政常 長州住 嘉永頃

直行 長州住 嘉永頃

- 長光 長藩 嘉永頃
- 一鐵 長府山人 嘉永頃
- 幸常 長州萩住 草字銘 嘉永頃
- 良未 嘉永頃
- 正幸 長州住 綾部氏 文久二
- 常興 藤山氏 明治頃
- 信一 豊浦住 鳥野友重一類
- 喜兵衛 豊浦住 大月氏
- 友定
- 日華 長州住
- 保幸 長州萩住 藤原氏
- 知貞 長州住
- 智義 長州住
- 畫鳳齋 長州住
- 光正 長州鐺工
- 光救 長州萩住鐺工
- 近常 萩住
- 金貞 長州萩住

- 友行 長州
- 有秀 長州萩住
- 常光
- 信清
- 信芳
- 信之
- 正信 長州住 毛彫銃鐺
- 正峰 長藩住
- 正昌 長州萩住
- 政光 長州萩 鑿鐺工
- 清久 長州萩 松井氏 鐺工

以上は皆系統不明なれども前掲十家に關係あるものと思はれます一見致しましたものは時代を推定し古きより順次書き列ね又未見のものは参考書より次第不同に抄録致しました此内には鐺師にあらざる金工もありませう。

長州鐺工各派及作品

古萩鐺に就ては秋山先生より懇切なる御注意ありて、長州鐺には何の關係もなきにより削除せよとの事にて、理由とする處は昨年十一月號かたな誌上、先生の雜感一東に御記載になりました通りであります、私も

其の關係の性質上削除する事に何等異議のある者ではありませんが、只だ故人が無銘鐔を捕へて、古萩の如き名稱を付するに就きましては、其處に何か據る處がありましたのではあるまいかと思ひますので、爰には其名稱を留め置き、今回の問題を幸ひに大方の諸賢と共に研究を進め、生殺の斷案は他日に譲り度いと思ひます、尙古萩に菊の圖の外見ませんのは畢竟私の淺見で、秋山先生は他圖の押形も御覽になりましたと承はりました、之れが或は平安城ではあるまいかと云ふのが問題の燒點であります、茲に謹で秋山先生の厚誼を感謝すると同時に、私如き者の書きました物まで御精讀下さいまして、御親切に御注意下さる御熱心は、只敬服の外ないと思ひますので御禮を申し上げ、旁々先生の御健康を祝します。

中井家

初代信恒は萩鐔工の祖と云はれて居りますが、作品は見ませんで何とも評する事が出来ませんが、此家では二代善助友恒(元祿頃)が名高く又上手であります、恐らく此國中第一と云はれなくとも、屈指の名匠たるは疑ない人であり、作鐔を見ますに、正阿彌傳で一様でありません、先づ地金に於ても鐵、銅、眞鍮、等を用ひ形に於ても眞丸、六木瓜、角形等あり、又細工に於ても消込象嵌、据紋、高彫、形肉彫透、摺付象嵌等ありまして、殆ど行きて可ならざるものがない様であります、得意とする處は板鐔に色金を用ひ、据物象嵌に高彫をなしたる正阿彌式のものである様に思はれますのは、畢竟此種のもものが多く遺されて居ります故であります。

四代善助後友恒亦巧手であります、鐵眞丸形と長丸形の兩種ありまして、鋤出し彫は古風にして先代に迫り、形彫透と据物象嵌が得意である様に思はれます、鐵の外變金を見させん、銘振りは二代とは相違があり、形彫透と据物象嵌が得意である様に思はれます、鐵の外變金を見させん、銘振りは二代とは相違があり、ます又往々後友恒作と銘されます。

五代友之の鐔は二枚見ました、鐵眞丸形厚手に倫子透し彫と、鐵眞丸形鋤出し彫八島武者の二枚でありましたが、此武者は耳を薄く取つてあります共に象嵌色繪の配色はありませんが、銘は只中井友之の四字でありました。

友信(友之弟)の鐔は二三見ましたが、其内の鐵眞丸式彫透し蕨葉鐔は、肉置が誠によく出来て居りました、此見ました二三の鐔は、象嵌等の配色はなく、銘は何れも草書の二字銘であります。此外では中井善兵衛友光作と銘ある鐔を見ましたが、後友恒作布袋と同圖の鐵形肉彫で、色金の据物の配色ある物でありまして、寧ろ二代友恒に似て居りますので、或は三代友幸と同人ではあるまいかと思ひました、因て記して他日の考證を待ちます。

又近日得ましたものに、長州友恒造と銘のある鐵角形肉彫透桐唐草の配色のない大小鐔がありますが、形は長手で時代は天保頃と思はれる物で、勿論銘の字も二代にも四代にも似ない物でありますから、僞物でない事は明らかでありますので、後代友恒と切りました人があると思はれます、當國に於て中井家は、河治氏に亞ぎて工人を多く出したと云はれて居ります。

岡田家

初代政知は未だ見ませんで評する事が出来ません、二代宣政は此家にて有名なるのみならず、當國屈指の名匠であります、三左衛門尉宣政銘の鐔を見ましたが、全く同作で所謂前作と稱すべきものでありますので、通稱善左衛門の前に三左衛門と稱せし時代がありました様に思ひます、作鐔を見ますに、埋忠姓を銘記

して居りますが、前にも述べました様に全く正阿彌化して居ります鐵、眞丸形、板鐔に、据物象嵌、色繪高彫、耕作の圖、及鯨人物の圖の二鐔は、正阿彌式の名鐔で、有名な此作の代表鐔であります、また鐵、眞丸形、車透しに金の配色ある鐔、其他二三を見ましたが、得意とする處は無論板鐔正阿彌式のものと思ひます、尙此作には他の地金を用ひないと見え、所謂變り金の鐔を見ません、三代宣重作鐵、眞丸形、板鐔に象嵌色繪高彫、巢父許由の圖を見ますと、之れ亦た正阿彌式板鐔が得意の如く、二代より稍、薄手であります又同作鐵、眞丸形、板鐔に金銀布目象嵌、露芝に蝶の圖も亦た正阿彌式で頗る美事であります、四代政詮作鐵、眞丸形、板鐔鋤出し彫、鳳凰の圖と、鐵、眞丸形、肉彫透し唐草の圖を見ましたが、金銀等の配色なく鐵は小形であります、六代政富作鐵、長丸形、板鐔に吉野川の圖、鋤出し彫、大小鐔と鐵、長丸形、倫子透しに龍を肉彫になした鐔を見ましたが之れ亦た金銀の配色なく小形で且つ共に厚手であります、七代政知作鐵、長丸形、松鋤出し彫に、金色繪千鳥の圖を見ますに、六代より薄手になります、六七代は共に地鐵良好で彫刻も亦た精巧であります、其他では宣繼作鐵、長角形、肉彫透し、雲の圖、及宣次作鐵、長丸形、菊葉透し、共に配色のない鐔を見ました多分同人作と思はれます、多少相違點のあるは年代の差異による處と思ひます、又通稱を彦左衛門と銘記して居る處より考へますと、近親の人と思ひます、又重義銘、宗武銘のものは、此地に京都より往來し作りたるものでありませう、此内宗武作元祿年號付鐵、角形、鋤出し彫、板鐔は正阿彌式で名作でありました。

岡 本 家

岡本兩家は此國の名家で、正阿彌系と思はれます、本家にては三代迄の作を未だ見ません、四代方高作鐵、長丸形、薄手に赤銅据紋、鴉に枯木高彫、裏は銀色繪の月に浪を彫りました鐔を見ましたが、宛然奈良物の様で、或は奈良物流行に化せられましたか、併しながら之れは無論變體のものでありませう、六代知賢作鐵、長丸形、厚手、鋤出し彫、登龍門の圖、露金の鐔を見ましたが之れは全然長州式でありました、七代豊章作鐵、長丸形、鋤出し彫、草字銘の鐔二三と、又燕里作鐵、長丸形、鋤出し彫、草字銘と同様の鐔で、柳燕子と銘記したものと、又小野光高作、鐵、長丸形、鋤出し彫、二三とを見ましたが、皆後の長州式で又巧手であります、光高の作は彫稍深い様であります、九代友義作鐵、長丸形、圓中近江八景を鋤出しになし、中を高く耳を薄く取りたる良い作の鐔がありました。

別家初代友次作鐵、眞丸形、肉彫透し、金象嵌、菊水の圖の鐔を見ました、薄手角耳で所謂前の長州式で良い鐔でありました、三代直勝作鐵、角形、鋤出し彫、竹林犬の圖の小鐔を見ましたが、厚手角耳であります、五代義次作鐵、長丸形、左右透し、上一輪牡丹彫り上げの鐔を見ました、後の長州式で左右透しは珍であります、六代茂恒銘、茂次銘、鐵長丸形、鋤出し彫の鐔二三を見ました、共に後の長州式であります。此以外岡本故兵衛友則作銅、形彫、貝盡の圖の鐔は長丸形式で、耳を薄く取りたる作り込みで、精巧なる彫の名鐔でありましたが、本家の通稱に小兵衛と云ふのがあれば、恐らく本家有縁の人と思はれます、岡本忠利作鐵、眞丸形、窓の透しに梅を鋤出し彫になした、薄手の鐔を見ました、光之作鐵、長丸形、牡丹鋤出し彫に、金色繪をなした鐔を見ました、後の長州式に配色のある處、江戸伊藤に共鳴した處があります、豊幸作、信周作鐵、長丸形、鐔出し彫の鋤を見ました、後の長州式で共に草字銘で且つ巧手であります。

金 子 家

金子氏は當國在來の工匠であります、初代は未だ見ませんが、二代幸仲は有名にて巧手であります、其作鐵、蓮葉形彫、露象嵌の鐺は、薄手で變體でありますが名鐺でありました、又鐵、眞丸形、肉彫透し薄手、菊唐草の圖の鐺は、此作常に見る處のもの、又鐵、眞丸形、鋤出し彫、浪に麒麟の圖は、丸耳で珍圖でありました、四代清正作鐵、眞丸形、肉彫透し、唐草の圖鐺を見ました、其他包朝作鐵、長角形、厚手、萩兔圖と、政信作鐵、眞丸形、鳳凰形彫、透し厚手鐺がありました、又金子十郎兵衛幸仲銘で、往々時代の若いものを見ますが、銘振りも多少相異の點があります、これは金工一覽には幸仲寛政頃とありますので、或は寛政頃にて二代と同銘を切る人がありましたのではあるまいかと思はれます、記して後證を待つ事に致します。

中原家

初代幸直作は未だ見ませんが、二代幸登は巧手にして名高く、好みて形彫透しを作りました様に思はれます、其幸久銘赤銅、形彫り、金色繪唐子遊の圖鐺は代表作とも云ふべき名品でありました、又幸登銘鐵、形彫透し枇杷に栗鼠の圖、天明年號付の鐺を見ましたが、眞丸形、厚手で、良い鐺でありました、中智光作鐵、長丸形、鋤出し彫、芦の鷺の圖を見ました、薄手で後の長州式であります、藤井家は未見に付き省略致します。

井上家

初代清高は巧手であります、鐵、長丸形、厚手鋤出し彫、二三を見ました、又鐵、形彫、金銀色繪、布袋の圖を見ました、之れは名作であります、此人の作には良否ある様であります、二代通高作鐵、長丸形、厚手鋤出し彫、登龍門の圖象嵌ある鐺を見ました、三代政高作鐵、眞丸形、形彫、布袋の圖厚手鐺を見ました。

八道家

當國に聞えたる家で友清は巧手であります、鐵、長角形、厚手に梅木、形彫透し鐺を見ましたが、佳作でありました、友信作鐵、眞丸形、鋤出し彫に、色繪ある藁家に鶏の圖と、銅、撫角形、鋤出し彫、金銀赤銅据物、色繪山水野馬の圖の二鐺を見ましたが、共に良品であります、友久作鐵、眞丸形、水仙の圖、肉彫透し、金色繪ある薄手鐺を見ました、幸久作鐵、角形、鐵線の圖、透し厚手鐺と、鐵丸形、笹葉の圖肉彫透し、金色繪ある薄手鐺を見ました、後者は七郎右衛門が草書で銘記してありました、友之作鐵、長丸形、鋤出し彫、金色繪ある薄の圖は薄手にして後の長州式であります。

河治家

當國名家の聞え高く、友近作鐵、眞丸形、肉彫透し、菊薄の圖、厚手、大形鐺を見ました、友周作三四鐺を見ました、其内の鐵、眞丸形、肉彫透し、金象嵌のある鼻皮の圖は、薄手にて前の長州式で名作であります、又鐵、眞丸形、板鐺、浪鋤出し彫に雁を透したる厚手鐺は、宛然安親作を見る如くであります、摸作か或は偶然共通しましたか良い鐺であります、又鐵、丸形、鋤出し彫、金色繪ある火焰太鼓の圖、薄手鐺は長州式の良いものであります、此作者は此國で屈指の名匠で、又駄作がありませんが、友近、友周、同訓に

讀めますので、或は同人ではあるまいかと思はれます、山本孫兵衛金幸作鐵、眞丸形、肉彫透し、金象嵌のある籠目浪の圖薄手鐔を見ました、前長州式の良品でありました、九里春政作鐵、眞丸形、透し菊に蝶の圖薄手鐔を見ました、糸賀作鐵、眞丸形に牡丹の花を小透しになし、唐草の金象嵌のある厚手鐔を見ました、が名作であります、同作鐵、撫角形、板鐔に金銀色繪のある唐松仙人の圖で、銀覆輪がありますが、此耳は後に掛けられたものと思ひます、又イトカ銘鐵、拳形、金色繪のある草駄天の圖を見ましたが、此二枚は金家摸造と思はれます、種亮作鐵、眞丸形、肉彫透し、葡萄棚の圖の厚手鐔を見ました、忠義作鐵、撫角形、金色繪、木の實の圖の鐔を見ましたが、正阿彌式でありました、友久作鐵、丸形、肉彫透し花、筏の圖丸耳、厚手鐔と、同作鐵、長角形、板鐔、鋤出し彫、柳に野馬の圖、角耳厚手のものの二枚を見ましたが、共に良作であります、久次作鐵、眞丸形、形彫透し、厚手鐔二三と同作鐵、長丸形、紅葉を押し合肉彫になしたる鐔とを見ましたが、此紅葉は良鐔であります、友範作鐵、眞丸形、鋤出し彫の龍の圖の厚手鐔を見ました、政次作眞鍮、長丸形、鋤出し彫、山水の圖の鐔は薄手で美作のものであります。

系統外では金信作が古雅であります、友信作鐵、眞丸形、色繪鋤出し彫、山水の圖の鐔を見ましたが、薄手で友の字變體であります、中井、八道兩家に同名の人がありますが、此鐔時代が一番古い様であります、盛綱作鐵、眞丸形、透し梅の圖鐔を見ました、厚手で地鐵鐵良好であります、友正、正定作は往々見る事がありますが、鐵、長丸形、肉彫透しが多く、友正に形彫透しを見ます、正定に金象嵌、又は金色繪があります、直行作鐵、長角形、鋤出し彫、紅葉の圖鐔を見ましたが、厚手大形で名作であります、古稀軒作鐵、長丸形、彫透し、猿猴水月の圖鐔を見ました、巧手でありました、其他常に見る處のものは省略致しました、以上述べました内優良と認めました中より、撰擇して寫眞を掲げました。

◎秋山先生、古萩鐔の疑義（かたな二九四號所載）。

「明治二十二年頃同縣の先輩に、今村別役兩君の壯年時代、刀劍會に屢列座して彼れ是れ教を受けたる人の天保年代より安政年間に亘つて作製したる、鐔の押形を在阪時代に得て調査するに、古萩と書入れたる梅の木耳地透鐔、木爪形杜若水草地透、木爪萩薄鹿地透、丸形浪に枝菊地透、撫角形枝菊陰陽彫地透等數枚あり、一度實物を見たく思ふて居る折柄、其撫角菊様の地透物が出て來りたれば買取りたるに、赤阪肥後物よりは時代古く、造り込も薄手にして、模様肉糸の如き小筋にして、至つて手際に見ゆれば愛藏の一に加へて、明治三十年頃歸東の日、此押形の實物を携へ來つて今村別役の兩兄に見せたる所、兩大家も壯年時代の事を思ひ出され、持主の白賁よりも兩兄の熱度が高くなり、大騒ぎになりて閑日には必ず道具屋を一巡して尋ねられたれば、撫角物は見當らざりしも、小倉氏の出されたと同形のものを得られたるが、是れよりして古萩鐔の名稱遍く同好者間に通用することとなりたるは、恰かも鎌倉鐔、根拔鐔の名稱が、商人間に用ゐられたると一般なり、白賁は其後今村兄と約して鐔の研究を分擔して取り調べて見ると、同形殊に同種のもの甚だ多し、小倉氏が菊に限るといはれたるは至極尤もなるが、併しながら決して他の模様もなきにあらず、又た小倉氏は何より此名稱を見出されたるか知らざれども、研究を進むる程長州物には縁遠くなり京物に接近し來りて、遂に京物及或時代の仕入鐔と認定するの止むを得ざる事となりたり。

第一に起りたる疑は、凡そ事物に新古の名稱を附するには、心ず之れを分つ區域なかるべからず、刀劍の新古、正阿彌鐔の新古の稱の如し、されば此長州鐔の其區劃は如何に見定むべきか。

第二、天正と有之も、天正年間には毛利家は萩在城なりしか如何、且つ同方面に戰鬪頻發最も多事の際なるに美術的優美なるものが製造せられたるは大に疑はしきことなり、尙ほ毛利家が萩に居城を定められたるは

慶長年間の事なり。

第三、天正頃に萩に此鐺の製作者ありしや否やは姑らく措き、今日存在せる長州鐺を見るに、天正はるか慶長時代の物すら甚だ稀にして、盛んに製作せられたる元祿、享保頃なり、殊に疑ふは、天正と唱ふる菊模様の物と、元祿、享保頃の物と毫も相似たる作なし、却つて京物に類似の點あり。

第四、叙上の押形に出でたる木瓜萩薄鹿の地透鐺は、此の他に二枚見たるが疑もなく京物の慶長少し以前の作なり。

第五、白貫は明治二十三年頃迄は、地透鐺は肥後、赤阪のみと思ひ、京尾張にあることを知らざりしが、地透鐺は各所に於て製造せられたる事を知ると共に、此古萩の類似品は、後の長州物はいふに及ばず、肥後、赤阪、尾州物に似たる點少しもなく、京物に對して少しく異なりて見ゆるは、僅かに耳の肉の相違あるのみ、此小異は元祿、享保頃の長州との相異の如く、決して甚しき物にあらざるを以て、古萩の名稱を非定して京物と認定したるなり。

終に臨みて一言すべきは、土佐人の鐺家は總べて古作を過愛したる傾あり故に此古萩の名稱も今一層古く見て否な古き物として京物に似るより、應仁の亂を避けて京人の多く大内の治下に入りたるより、同時に鐺工も彼の地に移住して製作したるべしとて、時代の上より肥後赤阪にあらず、又た京物としては少しく耳の肉に相違あるより、古萩と唱へ出したる物なるべし。

今一事は松宮觀山の刀盤圖九十二枚目の鐺が、會誌に出て居る鐺と同一なり、其書入れに菊古鐺肉置細工至つて手際よし、銘弘仁二辛卯八月日讚州丸龜住人紀信盛作と有之由、弘仁は今を距る一千百十餘年前なれば大に疑はるゝも弘仁の仁の字誤字にあらずやと思へども弘仁二年は正に辛卯に當れば誤字とも定め難く、

又た其鐺の圖様が、古萩と同様とは面白いではなきか、古萩鐺の稱呼を確定するには今一層の研究を要すべし、寧ろ姑らく削除せられむ方可ならんか。(終)

系圖に就て

毛利公爵家に明和二三兩年に亘り各作家より提出したる系圖に就て前掲系圖と相異の點を左に掲ぐ
中井家は源姓にて初代忠次通稱文右衛門。元祿十六年六月卅日歿。二代友幸。河治左兵衛友恒男。
享保八年二月十日歿。享年五十五歲。二代弟忠茂。通稱小左衛門あり。四代友恒を三代とし五代友
之を四代とし友之と並びて友則。彦左衛門。方孝豊田氏與三兵衛あり

岡田家は初代を正知、元祿元年六月八日歿、享年八十八歲。二代宣政、享保五年十二月十八日歿、
享年七十九歲。三代宣重、享保七年十月三日歿、享年六十三歲。宣重と並びて清記。中村氏新左衛
門。正久。多門、早世とあり

岡本本家は初代を友次、延寶三年閏四月十八日歿。三代友義を二代友光の弟となし享保十四年九月
廿七日歿、享年六十四歲。三代方高とあり

岡本別家は初代友次。寶曆四年四月廿九日歿、享年八十歲。二代知義。久米之助又甚左衛門とあり
二代と並びて義助。藤左衛門あり

河治權之允正周家系

初代道祐 名及死年月不詳、大内家の時防州山口住

二代友道 善兵衛、寛文元年十二月十五日歿、年齢不詳

三代友近 權之允、明曆四年三月四日歿

四代友直 六郎右衛門、友道男

友恒 左兵衛、友道男

五代友周 友近子、長次郎、權之允、貞享元年五月十三日歿、享年四十歲

六代友周 三之允、權之允、實は町細工人有田猪兵衛長子、妻女五代友周女、寛延四年十月七日歿、享年八十七歲

七代友富 彌平次、寶曆四年閏二月十六日歿

友序 善兵衛

八代正周 友富子、安右衛門、權之允、寶曆四年二月家督相續

河治權兵衛久次家系

初代友直 六郎右衛門、元祿十年二月廿日歿、年齢不詳

二代友次 六兵衛、六郎右衛門、正徳二年八月十六日歿、享年四十四歲

三代友久 百合松、權兵衛、六郎右衛門、寛保三年五月十一日歿、享年五十七歲

四代久次 虎松、權兵衛

貞次 久次爲養子

五代貞次 梅松、彦七、六郎右衛門

妹 河治正周妻

以上



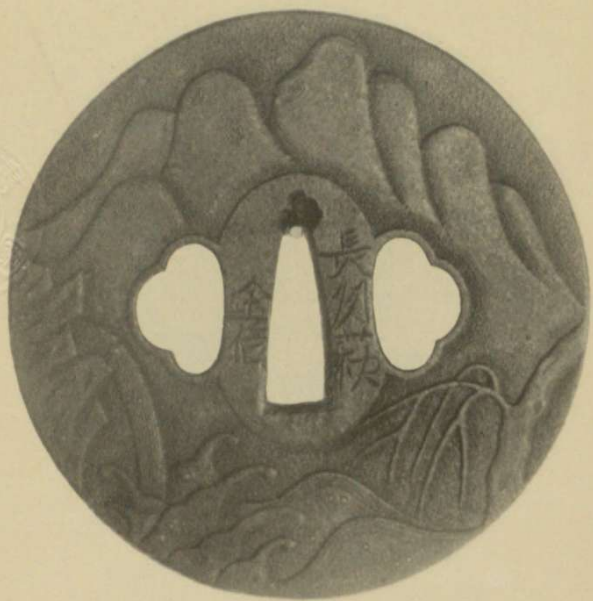
古萩(天正)

鐵丸形菊透 鐔

角耳厚一分六厘強

銘無シ





金信(慶長)

鐵丸形山瀧浪柳

裏雲岩流露金銀

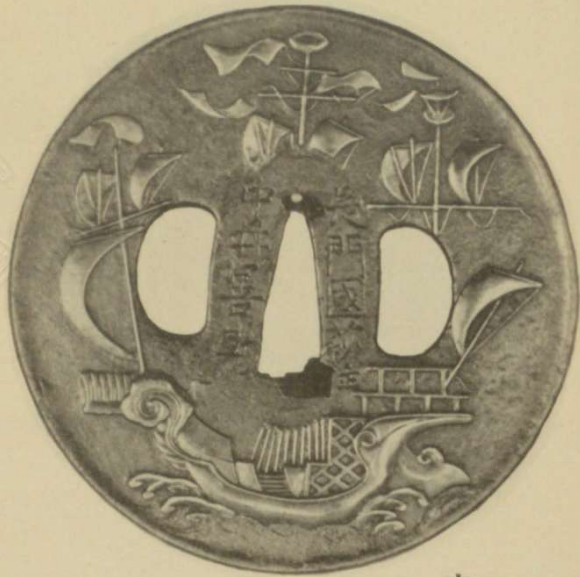
角耳厚一分五厘

銘表ニ長州萩金信

鐺



長州萩金信
 鐵丸形山瀧浪柳
 裏雲岩流露金銀
 角耳厚一分五厘
 銘表ニ長州萩金信



中井友恒(元祿)

鐵丸形唐松裏浪に千鳥

鐺

金銀赤銅真鍮銅据紋象嵌

耳布目金摺付打返し

角耳小肉厚一分五厘

銘

表に長門國萩住

中井善助

裏に友恒作とあり



中井友恒(元祿)

眞鍮丸形葡萄栗鼠

鐺

赤銅素銅据紋色繪

耳赤銅覆輪

角丸耳厚一分六厘強

表に長門萩住

銘 中井善助

裏に友恒作とあり



中井友恒(元祿)

鐵丸形桐唐草 鐺

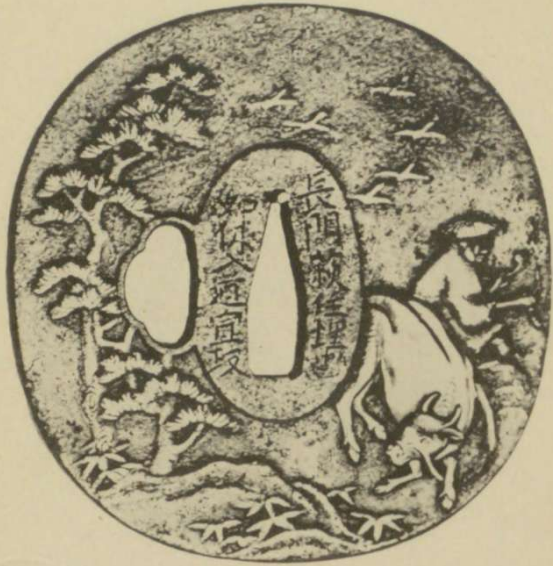
形彫透し金象嵌

耳平雷紋耳唐草象嵌

角耳厚一分三厘

銘 表に長門萩住
中井善助

裏に友恒作とあり



岡田宣政(元祿)

鐵撫丸形耕作 鐔

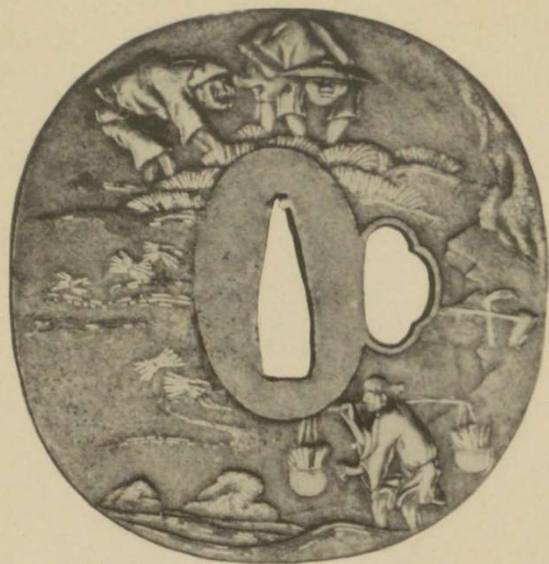
金銀赤銅真鍮素銅据紋色繪

耳雷紋象嵌

角耳厚一分四厘

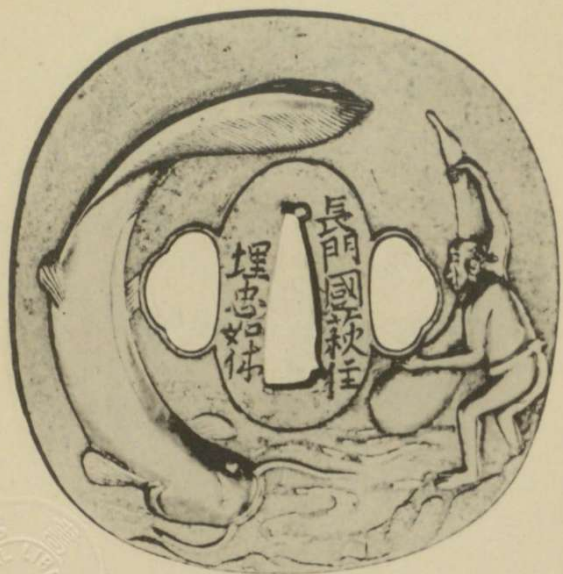
銘
表に長門萩住埋忠
如休入道宣政





岡田宣政
耕作の裏





岡田宣政（元祿）

鐵撫丸形瓢鯰 鐺

金銀赤銅真鍮素銅据紋色繪

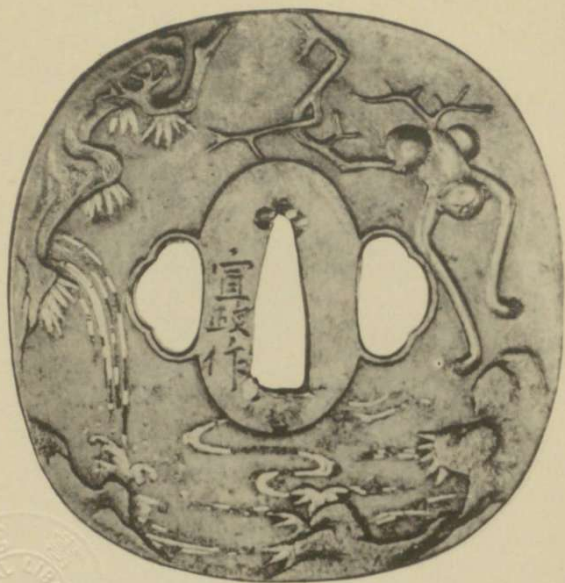
耳雷紋象嵌の跡あり

角耳厚一分四厘

銘 表に長門國萩住

埋忠如休

裏に宣政作とあり



岡田宣政の裏
山水枯木猿猴圖





岡本友次(元祿)

鐵丸形菊水 鐺

形彫透金銀象嵌

角耳厚一分四厘

銘表ニ長州萩住岡本友次作



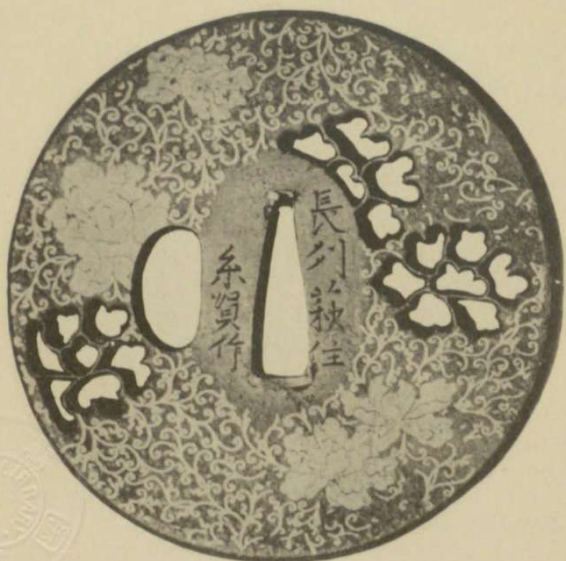
河治友周（元祿）

鐵丸形鼻皮 鐔

形彫透金象嵌

角耳厚一分四厘弱

銘表ニ長州萩住河治權之允
裏ニ友周作



糸賀（元祿）

鐵丸形牡丹唐草 鐺

金象嵌、花透

角耳厚一分五厘

銘 表に長州萩住
糸賀作とあり



中井後友恒(享保)

鐵丸形野馬 鐔

金銀赤銅四分一銅据紋色繪

角耳厚一分四厘

銘 裏に長州住中井友恒作

享保廿年八月吉日とあり

此寫真銘を示すが爲特に裏を出す
表も同圖にて馬の數多し



岡本友則(享保)

素銅貝盡 鐔

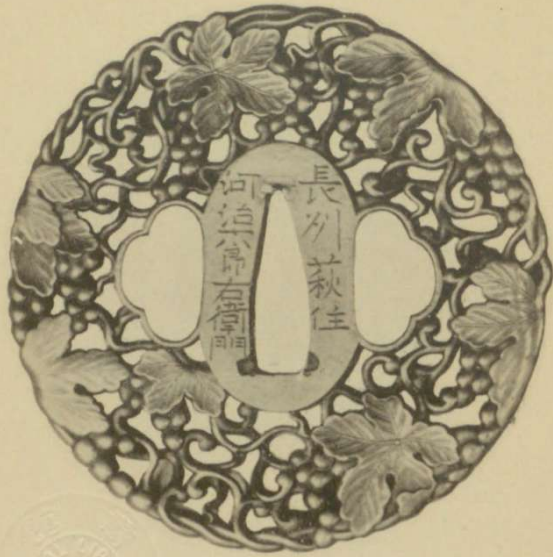
形彫透

耳薄く厚一分八厘乃至一分六厘

銘

表に長州萩住
岡本故兵衛
裏に友則作とあり





河治友久(享保)

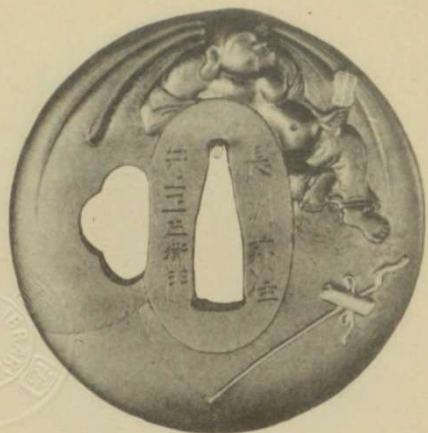
眞鍮丸形葡萄 鐔

形彫透し

丸耳厚一分六厘

銘

表に長州萩住
裏に河治六郎右衛門
友久作とあり



井上清高(寶曆)

鐵丸形布袋 鐔

形彫金銀色繪

丸耳厚一分七厘

銘

表に長州萩住
井上正左衛門
裏に清高作とあり



中原幸久(明和)

赤銅丸形唐子遊

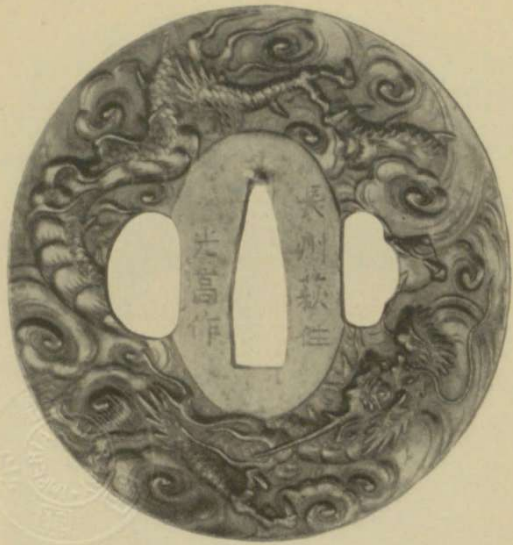
鐔

形彫金銀色繪象嵌

丸耳厚一分七厘

銘 表に長州萩住

中原幸久作とあり



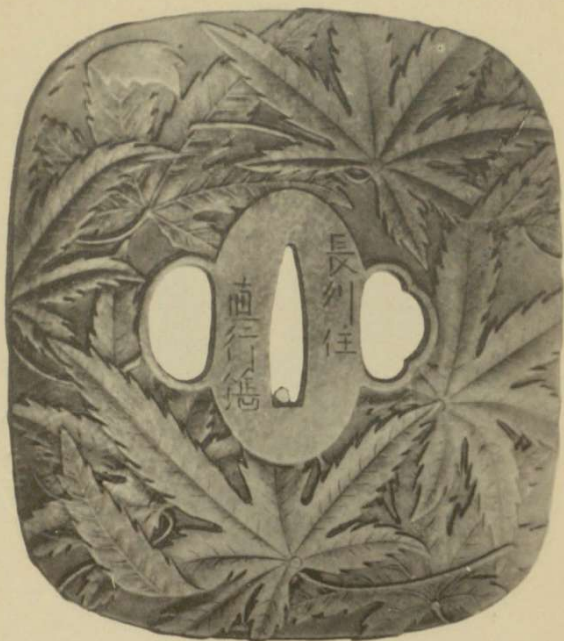
小野光高(天保)

鐵丸形雲龍 鐔

鋤出シ彫

角耳厚一分四厘

銘表ニ長州萩住光高作



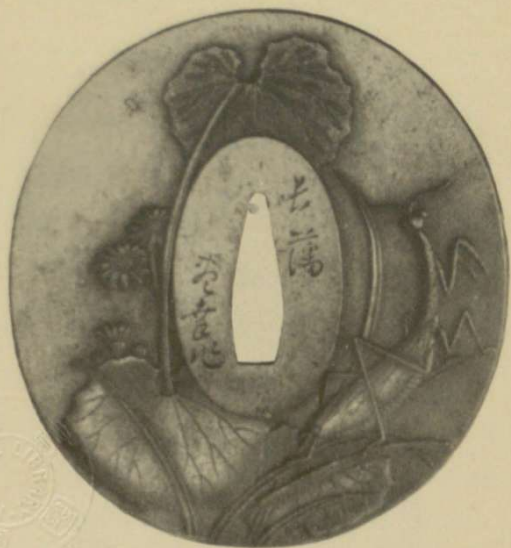
直 行 (嘉永)

鐵角形紅葉 鐔

鋤出し彫

角耳厚二分

銘 表に長州住
直行鐫とあり



豊幸(安政)

鐵丸形草虫 鐔

鋤出シ彫

角耳厚一分六厘

銘表ニ長藩豊幸作

昭和二年五月二十五日印刷
昭和二年六月一日發行

(長州鐔奧付)

著者

小倉惣右衛門

發行者

中央刀劍會本部

代表者

末岡武俊

印刷者

尾關脩治

印刷所

秀英舍

不許
複製

發行所

中央刀劍會本部

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京市麴町區富士見町三丁目一番地



188
609

